

2111 離島覚書（長崎県・沖ノ島）



住吉橋の先が沖ノ島

令和3年9月14日

鴨居瀬

小船越という地峡部から国道382号線の東側に半島が伸びている。沖ノ島はこの半島の先に位置する。

市道小船越赤島線を進み、旧鴨居瀬小学校の手前を南側に下った先に鴨居瀬という比較的大きな集落があり、この周辺の行政や経済の中心地となっている。三浦湾に面し、沖には黒島という比較的大きな無人島が横たわる。黒島は神が宿る島と言われており、アワビが海底の穴を塞ぐくらい多いという伝説が残る島である。天敵がないことからヘビがやたらと多いらしい。

この集落に、沖ノ島や赤島を統括する美津島町漁協鴨居瀬支所が置かれている。もともと鴨居瀬漁協として独立していたが、1998年の漁協合併によって美津島町漁協になった。支所には支所長と職員の2名（何れも男性）が常駐している。

鴨居瀬地区は、もともとイカ釣りや真珠養殖で繁栄した集落であった。イカが大量に獲れた半世紀前はスルメの加工が盛んであったという。しかし、イカ釣りは船の大型化と機械化によって資源減少をきたし、真珠は市況の悪化や赤変病の蔓延などの要因で衰退した。現在は魚類養殖と貝類養殖がメインである。漁船漁業はイカ釣り、曳縄釣り、延縄などが営まれている。魚類養殖は、クロマグロ（岡山水産）とフグ・クエ（大海水産）が対象で、2経営体が営む。貝類養殖はマガキとイワガキが対象で5経営体が営む。真珠養殖は島外資本の金子真珠㈱のみとなっている。

沖ノ島の組合員は、現在、正が2人、准が2人の合計4名である。

浜に面した作業小屋では、イワガキの出荷作業をしている人がいた。ボール状に成長し

たイワガキを1個ずつばらばらにしてグラインダーで付着物を除去しきれいに磨きあげる作業だ。彼は広島県の呉市に住居を有し、イワガキの出荷時期だけ単身赴任で鴨居瀬の実家に戻って作業をしている。呉ではカキ養殖の手伝いをしているとのことで、広島県で学んだイワガキ養殖を地元で展開しているわけだ。

イワガキ養殖に取り組んで17年になるそうで、きれいに整えられたイワガキは殻付きで福岡、長崎、熊本、鹿児島などの九州各県に業務用として出荷している。対馬はブランドで、販路には困らないらしい。種苗は県の栽培漁業センターから購入しているが、同センターは不慣れなため年によっては種苗生産に失敗することもあるそうで、この時は愛媛県の民間業者から購入しているが、購入単価は2.5倍になるとのことだ。



美津島町漁協鴨居瀬支所の建物（左）、イワガキの出荷作業（右）

住吉橋

鴨居瀬の集落から市道小船越赤島線に戻り、沖ノ島に向かう。本島と沖ノ島の間は30mほどの住吉瀬戸で隔てられており、橋が架かるまでは長い間渡し船が通っていた。

最初の橋は1971年に開通している。橋の全長は46.6m、幅員は6m、高さ12mであった。その後、島内の道路拡幅と合わせて、2004年に新たに橋が架け代えられ、現在は2代目になっている。

橋の完成によって厳原からの定期バスの終点は沖ノ島の東端まで延びたが、赤島との間には橋が架かっていなかったため、赤島の島民は渡し船で沖ノ島に渡り、ここからバスに乗り換えていた。

住吉橋の本土側のたもとに住吉神社が置かれている。神社を回り、奥まった入り江に数戸の家があった。

住吉大橋を渡って沖ノ島に入る。沖ノ島という島名は「沖にある島」という単純なものなので、全国の有人離島だけでも、琵琶湖の沖島、小豆島の属島の沖之島、高知県の沖の島など合わせて4島に及ぶ。また世界遺産の福岡県の島も沖ノ島である。橋のたもとの草むらに「辺地道路開通記念」と書かれた石碑が置かれていた。

島の道路は尾根筋を縦貫している。最近、旧道を拡幅整備したようで、新しい比較的まっすぐな道が赤島に向けて伸びており、山を切り開いたためか切通が目立つ。しかし道路沿いには家も、集落も、何もない。ただ道路の両側に切通と山が続く。

沖ノ島の面積は2.66 km²、周囲は23.0 kmで対馬の有人属島の中では、島山島に次いで

大きい。島のほぼ全域が森林で覆われ、尾根筋を貫く、市道とそこから海岸に下る道路が4～5本あるだけだ。平地は全くないから過去に農業が営まれた形跡はない。漁業のために移住してきた人たちは仕事に便利な海の近くに住んだものと思われる。

2015年国勢調査時の世帯数は18戸、人口は39人となっているが、おそらく赤島と泊島を含めた数値だろう。実際の居住者は5～6戸に過ぎない。



初代住吉橋の跡（左）、新しく整備された縦貫道路の切通（右）

乗越

鴨居瀬の人に沖ノ島といっても通用しない。彼らにとっては鴨居瀬の集落の一つという認識で、沖ノ島とは呼ばず、乗越と呼ぶ。もともと集落として一体だったからだろう。

乗越の集落は住吉橋の近くにあり、海峡を挟み、鴨居瀬からは眼と鼻の先に位置する。市道から急な坂を下っていくと海に出た。途中で家が1軒あったが、草木で覆われた空き家だった。入り江の奥まったところに人家と倉庫のようなものがあり、その前に設置された浮棧橋には「漁栄丸」と書かれた比較的大きな漁船が係留されていた。脇には船外機もあり、家の前には軽トラックも置かれていたので人が住んでいるのは間違いなく、漁業を営んでいるようだ。漁船には曳釣り用の竿が4本立っていたので、曳釣りをしているのだろう。

細い湾沿いの道は走れなくもないが、小雨が降っていてしかもガードレールがないことから危険を避けるために再び市道に戻る。



漁栄丸という漁船が置かれた乗越の家（左）、船外機が2隻置かれた乗越の家（右）

住吉橋の手前にやはり海に下る道があったので坂道を下る。下った先に家と生簀のある

浮棧橋があったが、こちらはどうも人が住む気配はない。やはり小さな入り江の奥に家が2軒あり、その前の浮棧橋に船外機が2隻係留されていた。こちらは人が住んでいる様子だが、2軒とも雨戸が占められていた。おそらく高齢者の家で、実際には漁業は営んでいないと思われる。

赤島大橋のたもとの家

この2つの道以外に海に下る道は赤島大橋手前の東西にそれぞれあり、橋を挟んで2軒の家が確認できる。グーグルマップの航空写真をみても、これ以外に人家は見当たらず山また山が連なっている。

雨が降り続いており、狭い不慣れな道を下に下るのは危険と判断し、赤島大橋の上から2軒の家を写真に収めた。

漁協で聞いた話では、赤島大橋の北側の家は漁師で、イカ釣りや曳釣を営んでいるとのこと。一方、南側の家は島外からやって来て塩づくりをしているという。おそらく常住していないのだろう。

つまり沖ノ島に実際に住んでいる家は4戸にとどまり、うち漁業を営む人は2人でこの人たちは正組合員になっている。残りの2人は准組合員として採貝藻を営む程度なのだろう。



猫瀬戸に面した漁業者の家（左）、猫瀬戸に面した製塩業者の家（右）

引き続き、赤島大橋を渡り、赤島・泊島を訪れた。